

## 笹淵友一著 『浪漫主義文学の誕生』

重松, 泰雄  
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12348>

---

出版情報 : 語文研究. 8, pp.31-31, 1959-02-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

笹淵友一著 『浪漫主義文学の誕生』

重松泰雄

三

サブタイトルに「『文学界』を焦点とする浪漫主義文学の研究」とあるによつて知られるように、明治二十年代のいわゆる前期浪漫主義、とくに、その中心をなす「文学界派」の浪漫主義に対する笹淵博士の膨大な御研究が、はじめて完成された一書の姿をとつて江湖にまみえた。多少ともこの方面の研究に思いを潜める者が、まことに待つこと久しい待望の書であつた。そうして、今眼前にあるこの一書は、正しくそのようなわれわれの渴仰の念に応え、後進への一大指針となつて、限らない感銘と示唆とをもたらしてくれる。向後近代浪漫主義文学を論じようとする者に、ここにはじめて信憑すべき基本的文献が与えられたといつても過言ではない。

ただし、はなはだ残念なことに、本書では主として分量の關係から、「焦点」となるべき肝心の「文学界」浪漫主義に関する部分割愛され、別に改めて続刊の予定という。したがつて、ここでは、もつぱら「文学界」に先立つて現われ、その先駆的役割を果した二十年代初頭（その頂点は明治二十二、三年の交と言われる）の誕生期浪漫主義に論の対象が限定されている。今これを具体的な文

学者について言えば、「本論」第四章に説かれる徳富蘇峰、同じく第五章の矢崎嵯峨の屋、第六章の幸田露伴、第七章森鷗外、第八章宮崎湖処子らである。博士によれば、これらの作家はいずれも「文学界」派の浪漫主義文学に先行して、いろいろな面で先駆的な立場を示したロマンティストたちであつて、なお未熟素朴な段階にありつつも、彼らの諸傾向はやがて「文学界」浪漫主義に継承されてゆくとされる。そして、そのような諸傾向は、各章の副題として挙げられた言葉がこれを端的に表示しているであろう。すなわち、第四章蘇峰には「啓蒙思想家と浪漫主義」、第五章嵯峨の屋には「浪漫的憂鬱」、第六章露伴には「キリスト教的浪漫主義」、第七章鷗外には「自我の覚醒とエキゾティシズム」、第八章湖処子には「アルカディアへの憧憬」の名がそれぞれ与えられているが、これらはいずれも、博士の指摘された彼らの先駆的諸性格を簡明に表現する語となつている。たとえば、蘇峰について、博士は、彼がもともと性格、素質の点で浪漫性に乏しい啓蒙的実利主義者でありながら、封建的横制のなお強力であつた時代環境のために、自ら意識せずして

浪漫的發言を行い、自ら期せずして浪漫主義運動の先駆的使命を担うこととなつたが、その反面では、ピューリタンの実践重視の立場において、「文学界」一流の考え方と決定的に対立している点のあることなどを指摘して、彼の、前期浪漫主義に対する先駆的意識と限界とを明かにされたが、「啓蒙思想家と浪漫主義」の語は、このような蘇峰の文学史的立場をきわめて簡潔に表明し得たものである。(ただし、このような蘇峰の場合をもって、「啓蒙思想家と浪漫主義」との間の、典型的な関係様相を示したものと見なし得るか否かについては、もちろん多大の疑問があるう。)

さて、以上挙げた蘇峰論によつても明かなように、誕生期浪漫主義について説かれた「本論」の各章には、しばしば傾聴に価する傑出した創見があらわれるが、しかも、それが、「緒言」の言葉を借りて言えば、「單なる伝記的、文学史的事実の発見や穿鑿」の面にとどまらず、一步すすんで、これらの事実に対する文芸思想史的「評價」の面に關聯して現われることはまことに偉とすべきで、まぎれもなく本書の大きな価値の一つとなっている。ここに、それらおびただしい創見の中で、とりわけ鮮明にわたくしの印象に残つたものを、いま一つ左に挙げるならば、それは、露伴におけるユニテリアニズムの影響を論じた部分である。この部分において、著者の考証は、いちだんと精緻をきわめ、先ず「方陣秘説」や「露伴々々」を通じて、露伴がユニテリアニズムの教義に理解を持ち、これに共鳴していたことを推定し、その關係から、露伴の当時の立場が「キリスト教的ヒューマニズム」の色彩を有することを指摘され、名作「風流仙」や、あるいは「風流悟」なども、その恋愛觀を検討し

て、このような意味における、キリスト教的、形而上的浪漫主義の作品と見るべきだとされた。かような露伴觀は、從來全く顧みられなかつた彼の思想、文学の一面を明かにしたもので、たとえば勝本清一郎氏などは、多少異存のあることを表明されたが、たしかに注目に価する見解である。

だが、かなり些細な事柄にまで問題の対象を拡げるとすれば、この傑出した「本論」の中にも、もちろん、時に多少の疑念を挟ませる余地がないわけではない。たとえば、紙幅の關係もあるもので、一応、第一章「近代日本文学の黎明」中の、二葉亭「浮雲」に關する部分だけに限定して言えば、博士は「三回あたりからは日本の新思想と旧思想を書いて見る氣になつた」という四迷の告白に關聯して、それが「ツルゲーネフの『父と子』などの示唆に負ふところが大きかつたと見られる」とされたが、これは、やはり四迷自身の間にもあるように、ゴンチャロフの『斷崖』あたりから導かれたものと考えられるし、さらに、主人公文三について、「ある程度二葉亭の自画像を文三に認めることができるにしても、それは『極端に誇張』されたもので、その誇張の方向にロシヤ文学、たとへばゴンチャロフのオプローモフのやうな人間像があつたと考へることは不自然ではない」とされたが、しかし、もともとこの「極端に誇張して作爲した」という内田不知庵の語自体が、むしろ「自然ではない」と考えられる節があるのである。すなわち、兩者に共通して見られる懶惰の性のみを取りあげてみても、文三には、農奴制時代の貴族たるどころから発したという、オプローモフの場合のやうな特徴的因子はなく、多分に氣質的、個性的な匂いが強いのであつて、二葉

亭が「オフロームツフの再現かと感ぜられた」とか「彼はルウデンである」とかいうような逍遙や星湖の言葉が示しているように、文三と四迷との距離は、「露文学の「余計者」との距離よりも、もっと近いと見る方が「自然」なのである。そして、このことは、また「浮雲」が第二編、第三編と進むにつれて、その心理主義的傾斜を深めてゆき、とくに第三編当時においては、当の魯庵が言うように、四迷は「モーゼレーの著述」「サリーやペイン」の書を受説し、同時に、第三編本文中にも「さるれえの「いるりゆうじよんすじ」という語が見えるという事実によつても要書きされるであらう。つまり、文三という人間典型の形成は、当初の目標はどうであれ、作品化されるに当つては、やはり二葉亭自身の内向的気質と、みずからそのような気質を自覚し、その本源を探らうとして耽読した、或る種心理学説などに負うところが多いと見る方が妥当と思われるのである。しかし、いづれにしろ、このような問題は、本書の主題からはかなり隔つた未精的な問題であり、それによつて、本書の持つ本質的価値が傷つけられることは全く有り得ないであらう。

さて、以上は、もっぱら「本論」によつて、本書の価値と特色とを見ようとしたのであるが、しかし、この書には、なおこれに先立って、「本論」における研究の主題と方法を確立するために周到に構想された「序説」が用意されており、そこにまた著しい本書の意義が秘められている。この「序説」は四章に分たれ、順に「ロマンティシズムの概念」「近代精神とキリスト教」「近代日本文学における浪漫主義史観の成立」「近代日本文学の課題と古典の伝統」となっており、第一章では、主として「ロマンティシズムの概念規

定を中心に英米独仏のロマンティシズム論の若干のものを検討してロマンティシズムの一般的性格と国家的特殊性」を見ようとされたものであるが、それが、単に各国ロマンティシズム論の平板な羅列や抽象的検討に了ることなく、あくまでも「西欧浪漫主義の理解を通じて日本浪漫主義批判の尺度を見出したいといふ具体的、実地的な」観点に即して進められてゆく点に、著者の慎重な配慮がうかがわれて意義深い。そして、このような配慮は、第三章の、わが明治大正期におけるロマンティシズム概念導入の史的跡づけと相俟つて、著者の意図を適確に実現する働きをなしている。すなわち、博士は西欧の各ロマンティシズム論を検討された結果、「情緒的な自我の解放を浪漫主義の本質と見、憧憬と想像とをその属性とし、この自我と憧憬と想像との三位一体」を西欧浪漫主義の主要性格と見なし同時に、これがわが国浪漫主義の批判にも「極めて相応はしい尺度である」との結論に到達されるのであるが、しかも、このような結論の背景に、浪漫主義の人間観には（たとえば、そのペシミスティックな苦悩において）「キリスト教の二元論が残した精神的遺産」があり、このような二元論と有機的一元論との間の漂蕩に浪漫主義の特質があるのではないかとの鋭い見解が潜んでおり、これら「憧憬」も「想像」も、要するに、浪漫人の現実が牢獄であり、彼らが自我分裂の苦悩に苛まれているところから発したのでという、独自の解釈が裏付けとなっている。さらに、著者は、キリスト教を大ロマンティック運動ないしその酵母と評価したグリアスンの見解を引き、西欧浪漫主義の「想像」も単なる知的、情緒的遊戯ではなくて、「憧憬」と一体となり、さらにその根柢には無限なるものへの

欲求をはらむ意志的な「自我」があるとされたが、これはたしかに貴重な洞察である。

そうして、本書の主要な特色の一は、また、このような立論の観点の明確さにかかっている。従来のわが国近代文学研究書が多く欠陥としたものは正にこの点であつて、同じような実証的緻密さを備えながらも、近時しばしば見受けられる、群小の「実証主義」的研究のごとく、実証のための実証、瑣末主義、相対主義に陥らないところにこの書の最大の長所が存するのである。しかし、観点の明確さは、反面客観性の犠牲の上に立っていることが少くない。本書の場合について言えば、浪漫主義とキリスト教的世界観との關聯性を重視するあまりに、他の重大な要素との關係を看過してはいないかということである。これは、必ずしも西歐のように典型的でなく、きわめて特殊な「近代」下に育つた、わが国浪漫主義を考える上において、いちだんと注意を要する事柄であるう。もちろん、この点については、博士も充分に顧慮しておられる。さればこそ、「日本文学の伝統が近代文学の形成にとつてどんな意義をもつてゐるかを明らかにすることがわが浪漫主義研究の重要な一つの観点であり、またそれによつてわが浪漫主義の個性も明瞭になると考へられぬ。」と述べられ、わざわざ、「序説」第四章として、「近代日本文学の課題と古典の伝統」の項目を設けられたのであるが、しかも、なお、この第四章は、マックス・ウェーバーやエルンスト・トレルチの説を通じて、近代文学——むしろ広く近代精神・近代文化全般とプロテスタンティズムとの交渉を把握し、その実証的な例をわが国近代に探求しようとした、第二章「近代精神とキリスト

教」などに比較すると、単に量的にも僅々四分の一度度に過ぎず、本書の重心が、本来どのような点に懸かっているかを、おのずかに察知せしめる。そうして、このような重心の在り方がさらに進むく、たとえば、露伴の「対欄體」に関して述べられているように、作品が「極めて空想的な構想によつて成立し、超現実的な情調、余韻」を持つ点から、「近代文学の性格から極めて遠い」とし、「そういう意味でこの種の悟道の文学の浪漫性は本研究の対象ではない」というような、研究対象の範圍にまで係わりを持つこととなつて来るのではあるが、しかし、このような非近代性の存在もたしかに、わが国近代浪漫主義の性格にまつわる動かしがたい一個の事実であり、たとえば、後の鏡花の浪漫性などを考えるに当つても、決してないがしろにできない事実ではあるまいかと考えられるのである。

以上、わたくしは、編集者の囑のままに、ほとんど身のほど知らずを顧みず、妄言を連ねて来た。もちろん、このような些細な疑義の介在によつて、本書の絶大な価値が傷けられることはいささかもあり得ない。はじめにも述べたとおり、まことに本書は、われわれ後進の徒にとつて此の上ない指標であり、また近代文学研究史上における一大金字塔であるといふべきである。ここに改めて、この偉大な研究を達成された博士に心から敬意を表し、そして、一日も早く統刊の部分が公にされ、業績の全貌が明かとなることを祈つて擲筆する。